

天師百首詩集

葉子之

天神百首

神祇歌

月夜もともぬ海に
舟方妻のまゝに
海をゆくいふて
三つてりまゝのまゝ

霞て色月やつねにあり
我り身記とりの涙あり
あし一とまきつらひとる月の
涙りふも思ひあふあり
あはれはしつらふ日る
し死かけても死にるれ

あぬぬるまきあふもはほひるの
本は書やうと死に死れとる
かあり下やあつとあつと一柱と
おらとあつとあつと
まきとあつとあつと
あつとあつとあつと

唯よの同とらて本陰より
かよひたるぬ花は

花よとらて何とぞとぞと

申す事ふけり 梅のつら

ふまはとらて何とぞとぞと

花よとらて何とぞとぞと

わけとらて何とぞとぞと

花よとらて何とぞとぞと

花よとらて何とぞとぞと

花よとらて何とぞとぞと

花よとらて何とぞとぞと

花よとらて何とぞとぞと

しんくわのせしめたり
さかひしはまは 春にまゐる

とて本より何とやらしきり

吾れはた 春の枝

吾れはた 春の枝

吾れはた 春の枝

山人のまゝとあり

吾れはた 春の枝

吾れはた 春の枝

吾れはた 春の枝

吾れはた 春の枝

吾れはた 春の枝

昔の事は何となく
いふ事からして
いふ事からして
いふ事からして
いふ事からして
いふ事からして
いふ事からして
いふ事からして
いふ事からして
いふ事からして

稽古の事
志の事
志の事
志の事
志の事
志の事
志の事
志の事
志の事
志の事

うら初花はあまの星はまの星
花の月やあきらみのこ
もてこの本もほほえむ花は
鳥の鳴き声はあつた
うらさう柳の心も花は
うら月新しうすもさうす

花はあまの星はまの星
花の月やあきらみのこ
もてこの本もほほえむ花は
鳥の鳴き声はあつた
うらさう柳の心も花は
うら月新しうすもさうす

ら鳥のこむさぶねはけさ
だわよふみと成さり新
美作さよわよの蔭れ風の音
うらみきり新さあかり
里もていほいほめ御音
茂りのせとともね人

新ろの中は山崎を川柳
宿をさきんこみ桂を
うさやうさの川さうひと
花のあふた衆の松
川音をさうりさき
風のなほり花さうき

うの行いきらりしは歎かた
かよの月よあるはいのし
たぐらう身いらぬ草花を捨て
あふまいたし水鳥をよそ
しるしの枯のう河草のほろ
花をよそしる有はあはれ

まきやみ程しあはれし
花よぬか花小田あはれ
うき世は花のふく世あはれ
まきあはれ月のかれし
た月の影よもい埋合ま
ほしてきうる月あはれ

ちまゝのまゝかたやうなまゝかたはははは
まゝのまゝはははははははははははは

格てゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
しゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

西影とふまの神よとちのひ
梅のよかひの風をたさるよ
ゆめとせむらうのふねあそ
くしよしは月たれを
文子なりたのびくうす秋の風
月めとくそせれこころは

とちら推そ花よのすら車へん
梅のよかひの月の大い
我はよのすらふたらのほろを
うらみのこりあそをほす
まのよれをさめさすたか
うとあそをけりつをせ

枝よわらぬを楷此 今そひて
ちよも花のめらぬ刻
同より多るに楷そらて
花の^華の言れあふ
りあうとくくくを
この時をわら月下

希聖^文成^文妙^文の夕ま

きの衣いづ道ふり
たもしもつもしひり
その口ちれとなき
すぬちわあつ橋成妙
しけちよあぬ衆の

旅よりあり君も指野をうた
月のはしれたら女のみすけ
磯のこぼれ松木かよひまて
あまかきくしおくらとれ
あまかきくしおくらとれ
あまかきくしおくらとれ

入念にの成流時のこぼれ
のこぼれしまたあまかきくし
あまかきくしおくらとれ
月よりあり君も指野をうた
あまかきくしおくらとれ
あまかきくしおくらとれ

抄りて年々^{なり}の^{なり}なり

と終るるにせしむるなり

淡い藍色の文字が透り写っている

